

# 「子どもの貧困」「子どもが貧困」に思う

## 外村まき

浄土真宗本願寺派人権問題啓発委員会委員  
チャイルドライン京都前理事長

答した児童に書き直しを迫る

⑥ 神奈川県川崎市中学校の男子生徒が複数人の少年よりの暴行死

⑦ 埼玉県立高校2年女子生徒がネット上での不適切な書き込み被害を

苦しむ

⑧ 福井県内で10代少女がツイッターで知り合った人より強制性交致傷

被害

(なお、「フリーダイヤル10年」の分類では①③⑤⑥⑦はいじめ、②④は虐待、①⑥⑧はネットトラブル、①③⑦

は自殺と表記されている)

今もなお、深刻な事件が日々続きます。

子どもたちのことを考える時、私にはある講演で聞いた忘れられない話があります。歴史はさかのぼり1853(嘉永6)年、マシュー・ペリーが率いるアメリカ蒸気船黒船が日本に来航し、当時、江戸の町は大混乱。そのような中で、渡来した外国人は、日本人の生活を目にし、日本の子どもたちは幸せな子どもた

子どもたちのおかれている状況は、いじめ、不登校、自殺自殺、虐待、ネットトラブル、また、最近では、子どもの貧困やヤングケアラーの問題が浮上しています。

チャイルドライン支援センターが発行する「フリーダイヤル10年」冊子の資料編に掲載されている事件の一部をご紹介します。

① さいたま市立中学校3年女子生徒が「ネットいじめ」を苦しむ

② 大阪市3歳児が両親の暴行により虐待死

③ 滋賀県大津市立中学校の2年男子生徒がいじめを苦しむ。事件前後の学校と教育委員会の隠蔽が発覚し問題視された

④ 東京都江戸川区で小学4年男子と2年女子の二人が無理心中により殺害される

⑤ 栃木市立小学校の教諭が市のアンケートで、「いじめがある」と回

ちであると伝えていました。当時の子どもたちは、両親そして近所に住む大人たちに見守られ、町内では異年齢集団が自然につくられ成長に見合った手づくり玩具で遊びに興じ、温かく包まれた環境で過ごしていたとのことでした。このような印象が記録されているのは、江戸庶民の生活に地域が子どもたちを大切に守り、育くむ環境があつたからでしょう。

その後、時代の変化、社会の変化に翻弄されていく子どもたちがいます。

1946年、敗戦とともに戦争孤児や浮浪児の問題が起こり、1954年には集団就職が開始される一方で、高等学校進学率が50%を超えはじめます。1960年から1980年にかけて、高度経済成長期、核家族化が進みます。高等学校や大学・短期大学の進学率が増えるとともに乱塾問題が浮上する一方、学校内で青少年問題が表面化、暴走族の急増。さらに、1983年、校内暴力がピークに達します。1985年、いじめと教師の体罰、不登校等の社会問題や、学歴社会、

管理教育などの影響を受け、子どもたちの心や体に変化が生じてきます。1990年には子ども（児童）の権利条約発効。1994年、日本で、子ども（児童）の権利条約が批准されました。

子どもの権利条約に謳われている理念には、

○子どもたちがおとなと同様の権利を持つ。

○子どもとおとなは対等な存在であり社会を作るパートナーである。

○子どもを一人の人間として、その主体を尊重する。

とあります。この理念に沿って「子どもの最善の利益」を保障する動きが始まり、法的にも子どもの人権を軸にして問題解決の筋道を考えようとする動きになってきました。

このような状況下、地域社会の問題点を行政のみに任せるのではなく、NPOの活躍の拡大、「フリースクール」「チャイルドライン」等、さまざまな草の根的な市民運動が生まれ、地域課題を市民自

らで解決をしていこうとする、うねりが始まりました。

### 「チャイルドライン」

1998年、日本にチャイルドラインが誕生し大きな変化が生まれました。

これまでは子どもが悩み、問題を解決したい時、必ず大人が同行し、大人を介して相談をしていました。つまり、子どもが子ども自身で相談する場所はなかったのです。そこで日本で子ども自身が自分の思いを電話で話し相談するという、唯一無二のチャイルドラインが誕生したのです。チャイルドラインでは、子どもの力を信じ、気持ち聴き「今」の気持ちに寄り添うことで、相談者である子どもは安心感を抱き自分の気持ちを整理することに繋がっていきます。このように、子どもの意志でつながる窓口が誕生したのです。

子ども・医療・福祉の現場では、まずはしっかりと思いを「聴くこと」「受けと

▶執筆者プロフィール



外村 まき  
とのむら まき

【略歴】

- 1947(昭和22)年生
- 2000年 京都子どもセンター設立に関わり理事長として就任
- 2011年 チャイルドライン京都を設立、事務局長に就任
- 2014年 チャイルドライン京都理事長に就任
- 2020年6月 チャイルドライン京都理事長を退任
- 2020年7月 NPO法人チャイルドライン支援センター理事に就任  
現在に至る
- 京都府人権教育・啓発施策懇話会委員
- 2012年より浄土真宗本願寺派人権問題啓発委員会委員に就任

めること」「寄り添うこと」が重視され、相談業務の基本とされています。チャイルドラインは、23年経った今、全国68団体に広がり、2020年度のアクセス件数は、電話の発信件数55万2352件、うち着信件数15万1812件、オンラインチャットの訪問件数8万5023件、書き込み件数1万7573件となっています。

子どもの80%は「話を聞いてほしい」と思っています。特に、2020年に発生した新型コロナウイルス感染症の流行は、全国規模で子どもたちに影響を与え、

同年3月からの学校の一斉臨時休校以来、しばらくの間は子どもたちから不安を訴える声が増え、チャイルドラインに相次ぎました。最近ではその数はやや減少し、子どもたちはこの生活に順応したように見えますが、心の中は決してそうではありません。2021年5月、文部科学省から児童生徒の自殺が過去最多という発表がありました。小学生14人、中学生146人、高校生は39人、計499人です。想像してみてください、中規模校の児童生徒が全員消えてしまうくらいの数です。この

重大な出来事でした。

子たちがなぜ死を選ばなければならなかったのか、文部科学省の原因分析は、学校問題が47%と最多、内容は学業不振、進路、学友との不平等となっています。2番目は家庭問題で、親子不和、家族からのしつけや叱責等が26%を占めています。女子は鬱などの精神的な問題も多く挙げられています。

「子どもの貧困」

そもそも子どもの貧困とは何なのでしょうか。子どもの貧困が子どもの生活全般にどのような影響を及ぼすのでしょうか。NPO法人「山科醍醐こどもひろば」の「実践サポートの基本編」から学びました。子どもの貧困は経済的な問題だけでは測れず、実際には貧困をベールにして問題を背負った子どもたちの行動や環境が、さまざまな困難や問題を誘発させていき問題解決に至らず、子どもが苦しめられていくことが問題で、虐待・不登校・非行がセットになりやすい

のが現状です。

「食事が十分に用意されないことによる慢性的な栄養不足で体調を崩している小学生。母親は精神的疾患の疑いがあるが病院に行ったことがない。あわせて祖母の介護も行っている。父親はストレスをアルコールなどで発散するしかない」というような事例があります。このように生活面の問題や介護の問題が貧困という問題の上に重なり、その影響を受けて、家庭での虐待や、勉強をする環境がなく授業についていけないことで不登校やいじめの対象になったりする子どもが増えています。

日本は今、人口減少社会、少子高齢化社会が進み、要保護、準保護家庭が就学援助を受給している小・中学生は全国で約155万人といわれています。

貧困状態の子どもが問題を回避できずにそのまま大人になると納税者の減少もつながり、社会保障費は高齢者が増え続ける以上益々増えていきます。現役世帯の負担がより増え、また新たな生活苦

を生み出し負の連鎖、格差が広がることになっていきます。また、貧困が何世代も続く家庭では、子ども自身が夢や目標への期待をもてない、希望がもてない状況をもつುತ್ತていきます。

### 「ヤングケアラー」

最近浮上している問題「ヤングケアラー」とは何なのでしょう。

家族規模が縮小し、家族ケアの力が弱まる現代。家族の中に病人や障害者などがいれば、子どもであってもケアを担わされるケースが増えてきました。しかし、家族介護者である「ケアラー」を支援しようという意識が希薄な日本では、ヤングケアラーという言葉さえ十分浸透していません。

専門家である成蹊大学准教授の澁谷智子氏の著書『ヤングケアラー』（中公新書）によると、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感

情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」と書かれています。ケアの内容は高齢者の介護に限らず、病気や障害のある家族の介助、精神的な問題を抱えた家族の世話などがあります。

かつての大家族の時代ならば、家族をケアする子どもは、家族思いの感心な子どもとして大切にされたかもしれませんが、核家族やひとり親家族が大勢を占める現代においては、頼る人もなく、相談する相手もなく、家族を支えていく責任だけを負わされることが少なくありません。睡眠不足や疲労から学業に支障が出たり、精神的に不安定になったり、自由時間が少ないために、友達との交流が制約され、孤立するなど、成長していく上での課題、危惧が生じています。

「子どもの貧困」は「子どもが貧困」ではないのです。子どもが低所得の環境によって、生活する上で困った状態になりやすい社会問題なのです。

## 「私たちにできることは」

私の原風景として、江戸庶民の子どもが大切にされてきた暮らしを書きました。が、その受け皿は地域であると考えています。

地域の中核には常に神社仏閣の存在がありました。「寺子屋」では、お習字や学習の場、神社では春夏秋冬の祭りもあり、祭りの運営は、青年団という大きな異年齢集団があり、子どもたちは、お兄ちゃん、お姉ちゃん存在に憧れました。また、京都では夏休み恒例の「地藏盆」という、子どもたちが主人公である最高の居場所があります。また日常では、お寺を中心に、子どもの成長にとって必要な三つの間「時間」「空間」「仲間」が揃っていました。子どもを送り出す大人たちにとって、最も安心できる空間として容認されていました。そして、大人たちも、喜怒哀楽を共にしたお寺の存在は大切な心のよりどころであり、地域の

人々にとって存在不可欠な場所でした。

このように神社仏閣は、地域の重要な拠点、地域住民の安心、安全な居場所として位置づけられ、宗教者は、地域のコーディネーターという重要な役割を担っていたのです。

このシステムを生かした、地域を包括する重要な拠点、心のよりどころの存在が、未来を照らすことにつながるのではないのでしょうか。すでに、地域課題を捉えて、子ども食堂やカフェを開催し、地域をつなげるお寺も存在します。

私たちの知恵を出し合い、やれることがあるのではないのでしょうか。「子どもの貧困」は、私たち大人社会が作った貧困であるということに自覚し、「子どもの貧困」という負の連鎖を「子どもが豊かに育つ地域」というプラスに変えることが、ひいては、子どもも大人も幸せにつながる環境を創れるのではないのでしょうか。